

専門家会議

2021年2月5日（金）

オンライン開催



2021年2月5日（金） 専門家会議

趣旨

北米・欧州・日本の日本美術担当学芸員及び関連部署の博物館職員が業務上で直面する問題などについての発表と討論、情報交換。

会場：オンライン開催

議長：河野 一隆 東京国立博物館

進行：鬼頭 智美 東京国立博物館

出席者（敬称略）

（北米）

ローラ・アレン	サンフランシスコ・アジア美術館
フランク・フェルテンズ	フリーア美術館
アンドレアス・マークス	ミネアポリス美術館
アン・ニシムラ・モース	ボストン美術館
リアノン・パジェット	ジョン・アンド・メーブル・リングリング美術館
アーロン・リオ	メトロポリタン美術館
スティーブン・サレル	ホノルル美術館
シネード・ヴィルバー	クリーブランド美術館
シャオチン・ウー	シアトル美術館

（欧州）

ロジーナ・バックランド	大英博物館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館
ダーン・コック	ライデン国立民族学博物館
メアリー・レッドファーン	チェスター・ビーティー
ウィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
アンナ・サヴェルエヴァ	エルミタージュ美術館
カーン・トリン	リートベルク美術館
アイヌーラ・ユスポワ	プーシキン美術館
山田 雅美	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館

（日本）

河野 一隆	東京国立博物館
鬼頭 智美	東京国立博物館
フランク・ウィットカム	東京国立博物館
マリサ・リンネ	京都国立博物館
メアリー・ルイン	奈良国立博物館
白井 克也	九州国立博物館
江村 知子	東京文化財研究所

会議概要

今回は新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大のため、ウェブ会議システムを使ってリモート会議を行った。時差がある中で世界各地をつなぐ会議となったため、会議時間は例年よりも短くなったが、コロナ禍で直接的な交流が難しくなる中、貴重な情報交換、ネットワーク作りの場となった。

会議では、下記2議題について各3分程度の問題提起の発表があり、続いて討議・情報交換が行われた。

議案1. サステナビリティと学芸業務

メンノ・フィツキ（アムステルダム国立美術館）

問題提起

地球を取り巻く様々な問題の現状を可視化した、いわゆる「ドーナツモデル」がある。このモデルは、環境問題や社会問題の過不足を示すもので、できる限り全体がドーナツ形に近づくことが望ましいとされる。重要な点として、これらの問題は相互に関連しており、ある分野での解決策が他の分野で問題を引き起こすことがあるため、システム全体の健全性を考えることが必要である。

アムステルダム国立美術館の Nitish Soundalgekar 氏は、ドーナツモデルを博物館業務に置き換えた。その図によると、アムステルダム国立美術館では、多くのごみが発生すること、展示替えの期間が短く多くの職員にストレスを与えることから、展覧会の分野で健全性が低いという結果が出た。

この考え方をどのように学芸業務に結び付ければよいのだろうか。

一つは、地域とのつながりを見直すことがあると考えている。学芸業務に、地域の人々や他の部門の学芸員に参加してもらい、また近隣の博物館のコレクションを探索することにより、その地域に眠る文化財に光を当て、さらなる活用や新しいストーリー作りができるのではないかと。自館の収蔵品をもっと上手に活用することで、新しく魅力的なつながりが鑑賞者との間で見つかる可能性があると考えている。

討議内容

- ・展覧会は運搬や展示の関係で出るごみが多いという点で環境への負荷が大きく、サステナビリティの面では問題がある。
- ・リサイクル可能な素材の使用や資材の再利用に関する日本の現状説明：東京国立博物館でも特別展で使用する展示ケースは可能な限り再利用しているが、非常に短時間で展示の設営・撤去を行わなければならないことから、リサイクルについては不十分である。
- ・新型コロナウイルス感染症の拡大は、大きな展覧会を何度も行うことの意味を再考する機会となった。これまで収益を上げるために行ってきた大規模な展覧会の頻度を下げ、常設展に力を注ぐことで、地域の鑑賞者にとってより意味のある展示にすることができる。
- ・展覧会はこれまで最も大きな収入源であったことから、ビジネスモデルそのものを考え直す必要がある。
- ・サステナビリティ向上の取り組みの例：ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館は昨年から

サステナビリティ・マネージャーという専門職を置くことになり、積極的にサステナビリティを話題に取り上げるようになった。現在方針を検討中で、将来的には展示具・ケースのリサイクルやデザインについても、それに従って行うことになる。

- ・展示の社会的包摂性や博物館スタッフの雇用の安定性を向上させることも、博物館のサステナビリティにとって重要である。

議案2. アクセシビリティを高めるためのミュージアムのウェブサイト・収蔵品データベースの改善 山田雅美（ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）

問題提起

博物館の収蔵品のデジタル化に関する議論は数年にわたって続けられてきたが、今回は新しいデジタルポリシーや最近開発されたプロジェクトに焦点を置きたい。新型コロナウイルス感染症の拡大により、物理的な博物館へのアクセスが制限される中、収蔵品データへのオンラインでのアクセスの重要性が増してきている。そこで、参加者たちの所属する機関で、ウェブサイトや収蔵品データベースへのアクセシビリティを高める議論はあるか、また既存のオンラインデータベースの質を高める方法について議論が行われているかお聞きしたい。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館の例として、現在のオンラインデータベースは、元々は2009年に立ち上げられたものだが、収蔵品のブラウジングがしにくい、また関連する作品や新しい作品を発見することが難しいという問題点がある。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館のデジタルメディア部門は、新しい検索エンジン「Explore the Collections」を開発しており、新しいウェブデザインと機能で収蔵品検索がより容易になる予定である。また、他の新たな特徴として、「You May Also Like（これも好きではないですか?）」という、利用者の検索情報をもとに、利用者が興味を持ちそうな他の作品を提示する機能がある。

討議内容

- ・ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館は、訪問者数やどの国からアクセスがあるかなどの情報はあがるが、通常はデジタルメディアチームが情報を管理している。彼らともしっかりコミュニケーションを行うことで、学芸部門が利用者のニーズに対する理解を深めることができ、データベースの改善につながれると考えられる。
- ・ウェブページやデータベースの利用者が、探していた情報にたどり着いていないのかわからない。
- ・統計によれば、利用者の多くは所蔵品の検索のためにウェブページを訪問していることから、もっと収蔵品に関するウェブページを改良して、作品に関するコンテンツを増やすべきである。
- ・人々により多くの情報を届ける取り組みの例：作品に関するブログや短いエッセイ、動画などをデータベースに加える。インスタグラムを活用して作品情報を発信し、より詳しい情報を知るためにデータベースに導くなどの工夫を行っている機関もある。
- ・日本国内の博物館でのオンラインコンテンツは、パンデミックの影響で、展示室内の多言語表

示だけではなく、オンラインコンテンツにおいても多言語対応が意識されるようになった。

- ・コロナ禍でも、東京文化財研究所の蔵書のデジタル化プロジェクト、オランダ・ライデン国立民族学博物館と立命館大学アトリサーチセンターが共同で行っている日本文化資料のデジタル化資料の公開をはじめ、多くのデータベースやオンラインコンテンツが公開または準備がされている。

短い時間ではあったが、1月30日の国際シンポジウムと合わせて大変意義のある会議となった。

なお、正式な会議の終了後、約30分間会議を継続し、現在対面での交流が難しい状況で、専門家同士での自由な意見交換の場を提供した。